

救主降世預言及應驗

020852-000-7

特47-472

救主降世預言及應驗

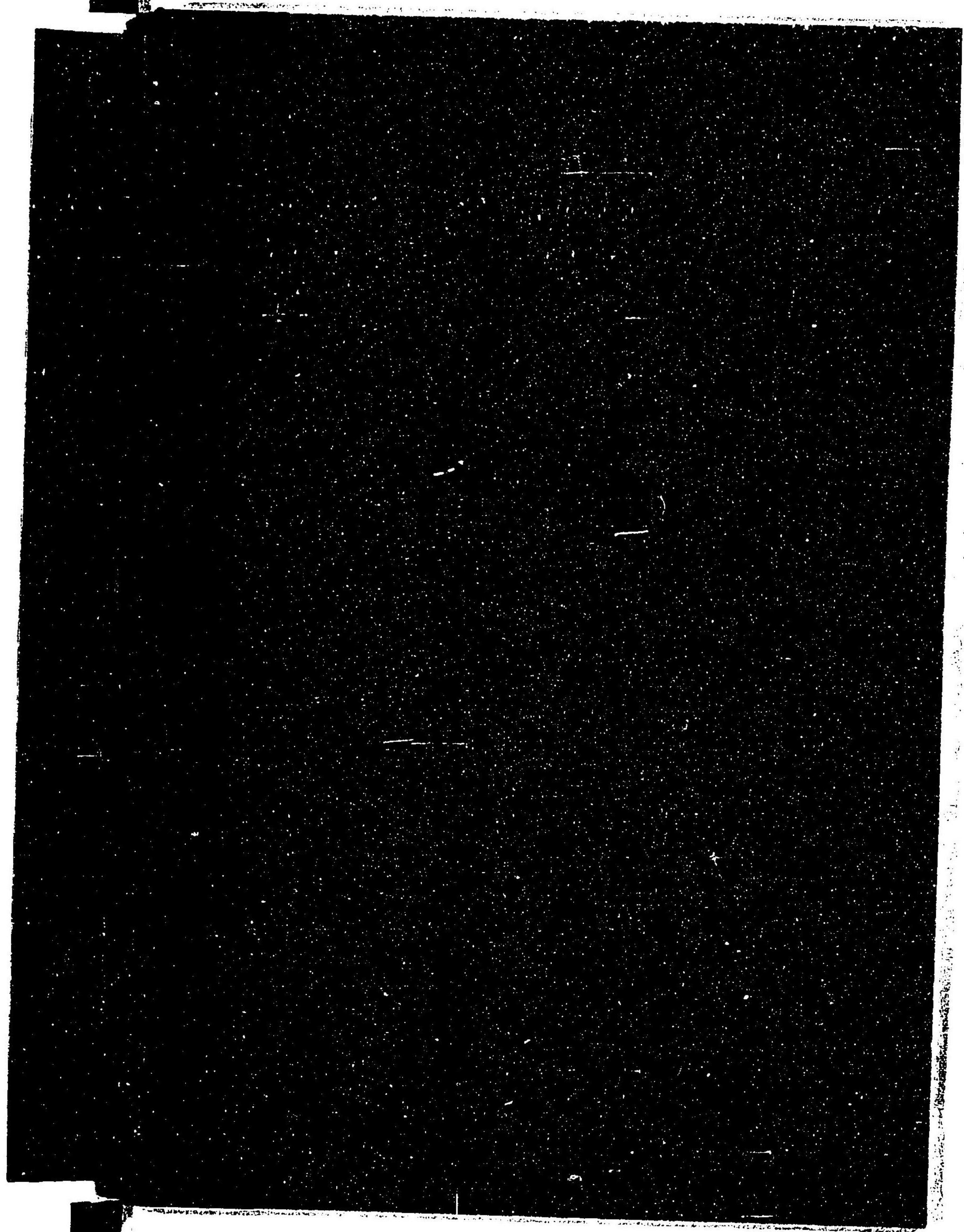
田中 萃一郎/訳

M23

ABI-0683



特



ex 657

THE
PROPHECIES WITH FULFILMENTS.

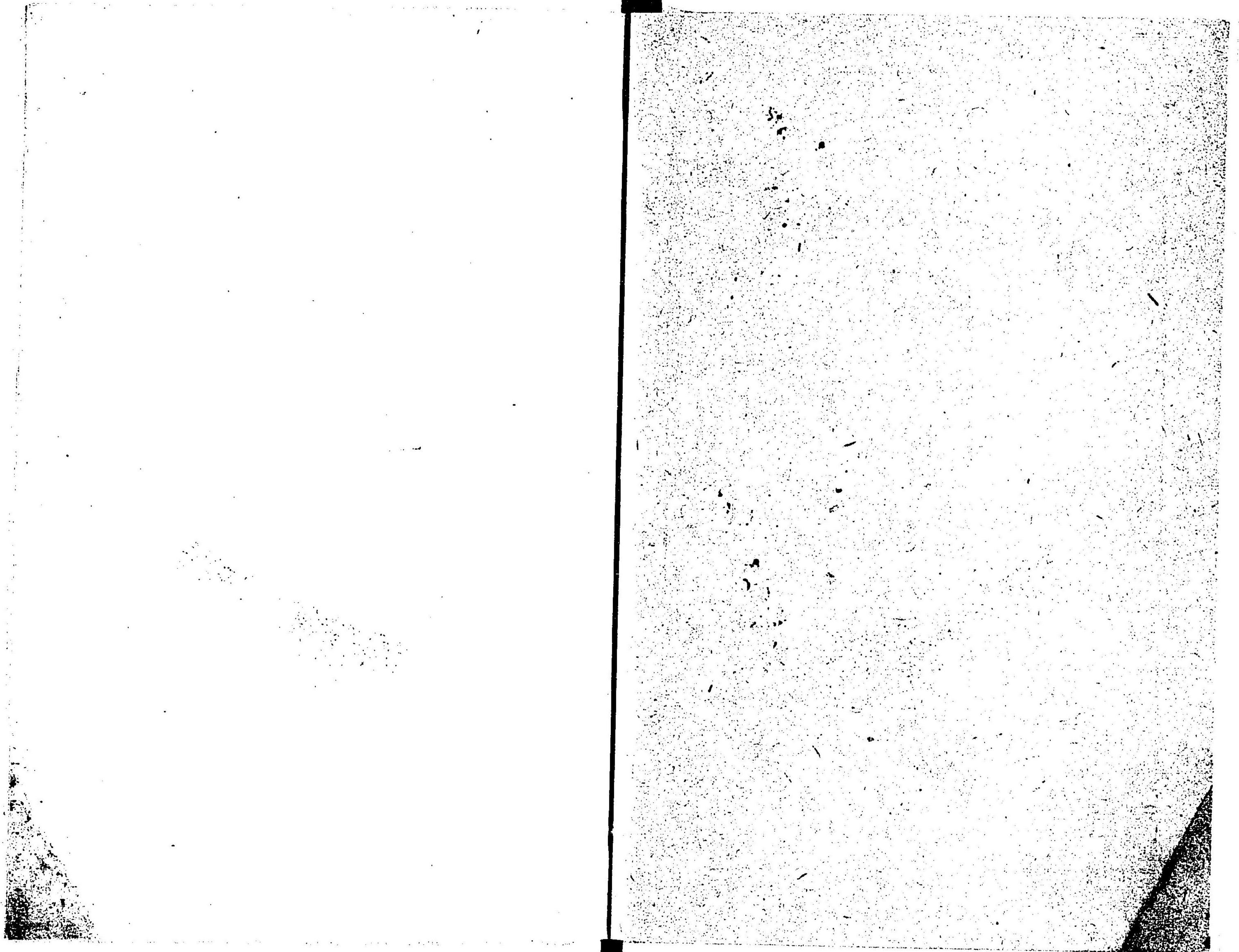


救主降世預言及應驗

明治二十三年

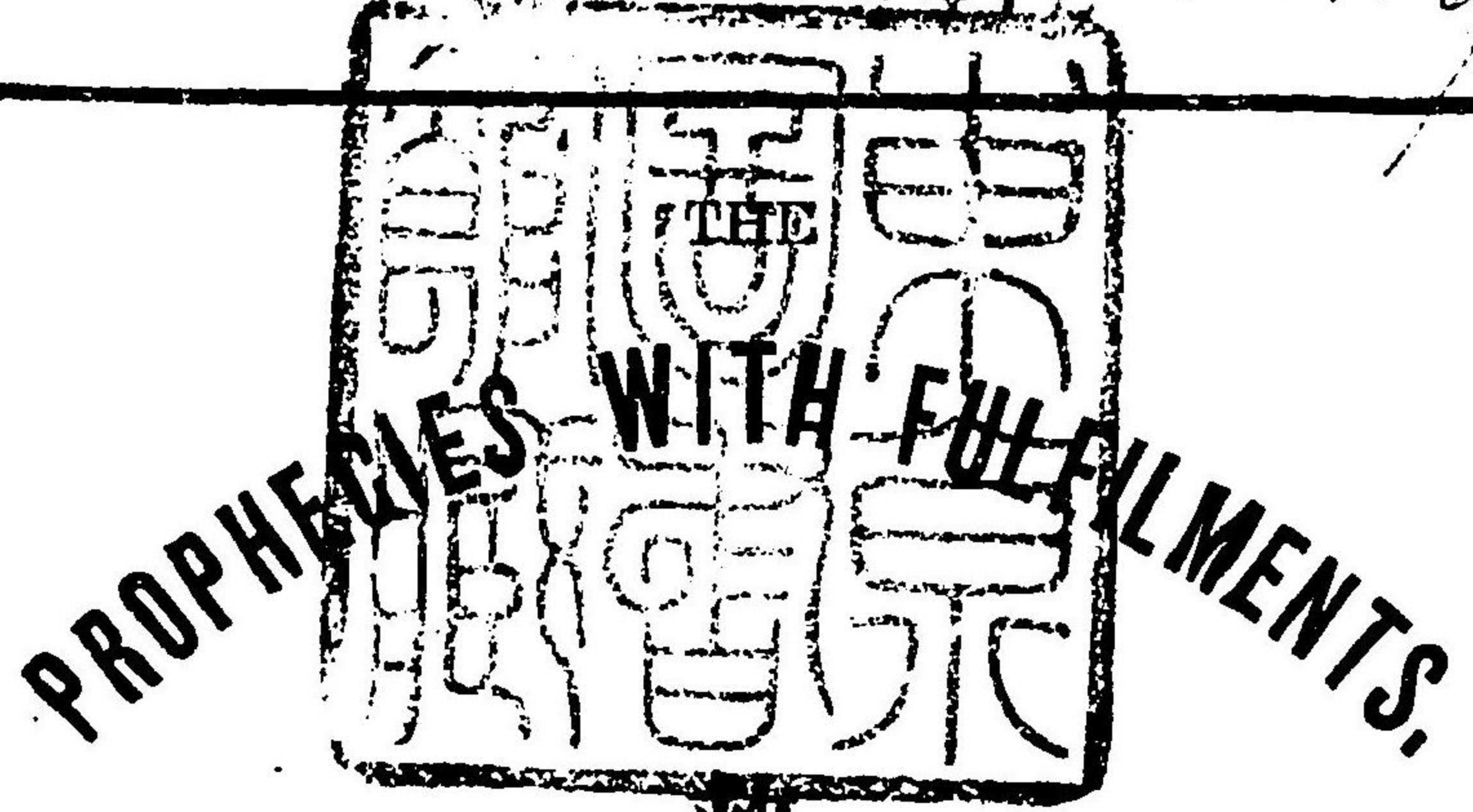
東京 丸善發行

全



特47

472 N23706/23

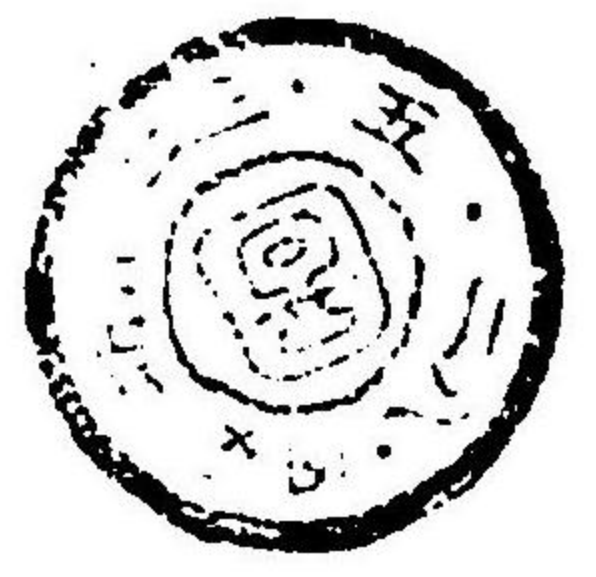


救主降世預言及應驗

明治二十三年

東京 丸善發行

全



(一)

緒言 我基督教は其基礎となす所多く、怡も支柱多き家の如し。而して此基礎に種々の種類ありて、或は未だ基督教徒たらざる者の信仰を得るの用に供ゆるものあり、或は既に基督教徒たる者の信仰を得るの用に供ゆるものあり、再び之を家屋に比ぶるを得べし。家屋の柱にして外部より見るを得べきものあり、又は内部に入りて始めて見を得べきものあり、或は如く基督教の證據にも誰が見ても疑を容るを得ざるものあり、又基督教會に入りて后始めて悟るを得べきものあり。豫言の證據は後者に屬するものと謂ふべし。蓋し此事たる未信者には重要を感ずる能はざるべし。と雖も一たび基督教徒

教の眞理を知るに聖典の疑ふべからざるを認めたる者
 には此豫言の議論たる其信仰を増加し且強固するに於て
 大に力あるものたり
 今此小冊子に於て舊約聖書中なる數多の豫言と新約聖書
 に記載せる其成就とを列記せり是に據りて見れば我等の
 主の生活及び性質の重要ある境遇及び特質は既に率ね舊
 約聖書中の諸所に豫言されたるを知るべし(全とは云はざ
 るも)又豫言者の豫言せるが如く萬事の起りたるを知るべ
 し若し舊約聖書の一巻の書にわらずして殆ど二千年の間
 時々成れる書物を集めたるものなるを知り且舊約聖書中
 に記載せる豫言の二千年餘の長期限に亘れることを知らば
 基督の此世に來り玉へるは決して早急に企たれることにも

あらず又不意になせるとにもあらずして上帝の眞心は數
 世紀間人類を救はんとの企圖をなし其執行の支度をなし
 且預言者の口を借りて度々其大事業のさる一小部分を示
 現し玉ひし事を見るならん
 然らば我宗教の單に偶然に出たる事にもあらず又人類の
 工夫せし事にもあらずて全時代の全人類を包括せんが爲
 め上帝自ら企て給へる事たるや明あるべし且又豫言を以
 て上帝が其企業を營みたまうに當りて長く忍耐強く働作
 し玉へることを知り得べし故に若し此事を考ふるに於ては
 我等が企圖をなすに當て殊に其宗教上の事業を行に當り
 て忍耐あらざるべからずと云ふ教訓を得べし
 基督に就きての豫言の後に基督の模範を集めたるものあ

り摸範とは一法或は他法によりて基督を豫表せる人又は
 行を云ふなり即ちアブラハムのイサクを捧けたるは唯一
 人の子を與へ給へる神の摸範なり山の上に柴薪を運びた
 るイサクはゴルゴダに十字架を運び給へる基督の摸範な
 り又此のイサクの不思議にも父の手に返りたるは奇異に
 も死より蘇生たまへる基督の摸範なり
 是れと同じくイサエルの民の救の爲に犠牲とせられたる
 逾越の羊は人類を扶けん爲に死したまへる基督の摸範な
 り軍營の外にて殺されたる牡犢はエダヤの民に追はれ
 ルサレムの町の外に於て十字架に釘られたまへる基督の
 摸範あり又負罪羊は罪の赦を現はし銅の蛇は基督の十字
 架の権力を示す

豫言を以て語に依りて其民を教へ給ふ神の法となさば模
 範は行に依りて人を教へ給ふ神の法なるべし二者同じく
 必要にして實に之を了解せんと欲せば眞の神靈的精神
 にあらざれば能はざるなり通常人には預言も實に趣味な
 きものにして摸範も亦解し難きものならん然りと雖も信
 仰と祈禱とに依りて學びたる基督信者に於ては此預言と
 云ひ模範と云ひ非常に利あるものにして最上の利ありと
 云ふも敢て過言にあらざるべし

目録

救主に就きての總體の約束	一
キリストの地に來るべき時	二
「パプテズマ」のヨハ子の來る事	四
キリストの降誕	八
アブラハムよりキリストの降るべき事	一一
キリストのユダの族より出ダビデの家より來るべき事	二
キリストの處女より生るべき事	五
キリストの務	六
預言者たる事	六
教師たる事	七

頁數

救主たる事 一七
 牧者たる事 一七
 祭司の長たる事 一八
 王たる事又審判主たる事 一八
 キリスト聖靈に充たされべき事 二〇
 道徳上キリストの圓滿ある事 二二
 キリストの生涯に於ける境遇 二六
 財産の少かりし事 二六
 不思議をなせし事 二七
 反對を受けたる事 二九
 エルサレムに入る事 三〇
 欺かれたる事 三二

棄てられたる事 三四
 苦を受けたる事及死の事 三五
 埋葬の事 四四
 復活の事 四五
 昇天の事 四六
 聖靈の注ぎ 四七
 キリストの救異邦人に迄も及ぶべき事 四八
 キリストの模範 五一
 其犠牲 五一
 ヨナ 五二
 逾越の羔羊 五三
 營の外に携へ出されたる牡犢 五四

(四)

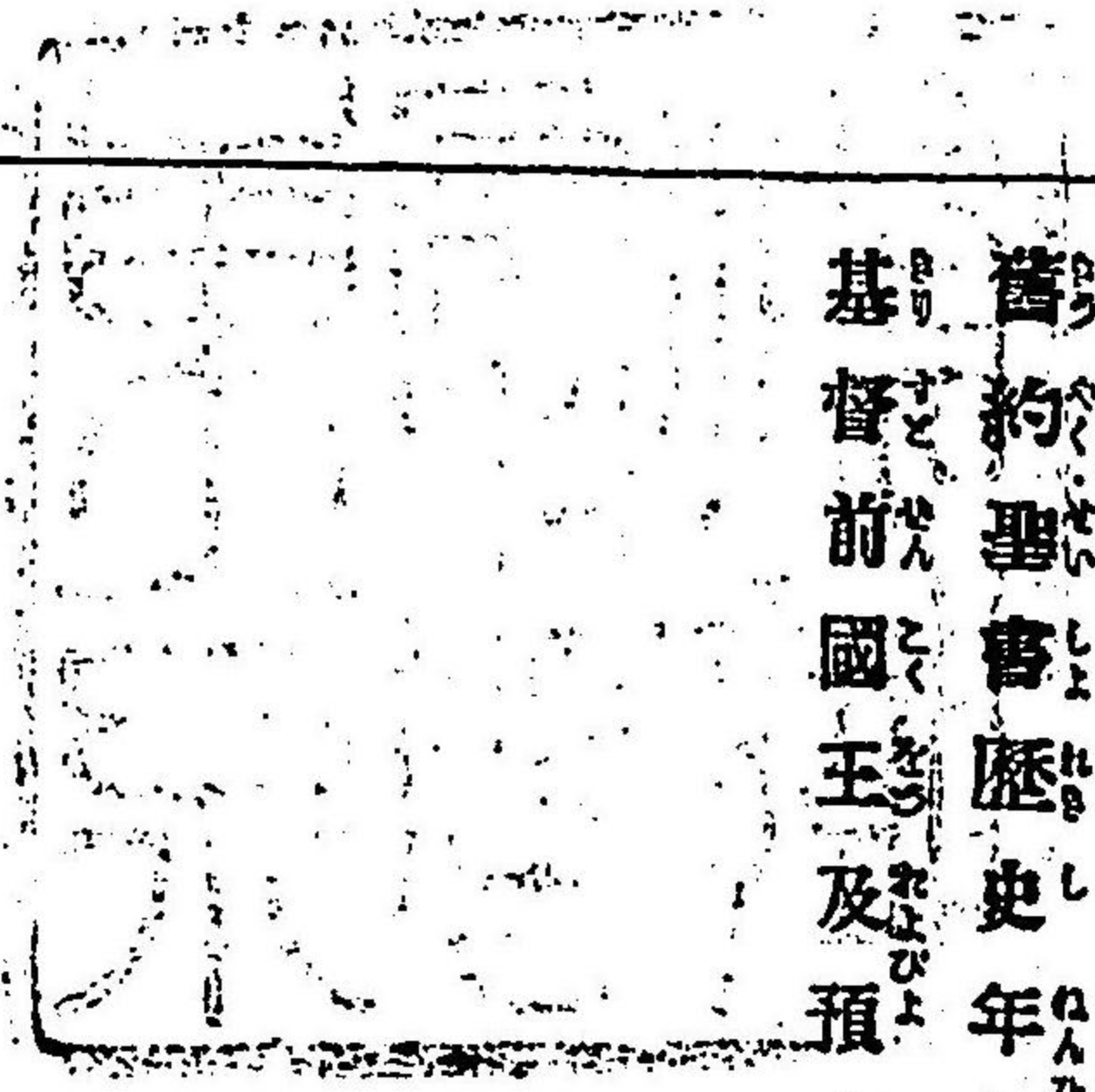
負罪羊

銅の蛇

舊約聖書歴史年表

基督前國王及預言者年代比較表

五五
五六
五七
五八



目錄終

預言及び其應驗

總體の約束

我汝と婦の間をよび汝の苗



創三。十五

然ども期すでに至るに及び
て神その子を遣し給へり彼
は女より生れたり(加四。四)
罪を犯す者は悪魔より出そ
は悪魔は始より罪を犯せば
なり神の子の顯るゝは悪魔
の工を毀たんが爲あり(約壹
三。八)

(一)

五節を見よキリストのアブラハムの家より出るを知ん
創世紀第三章人類墮落の話を讀むべし

*此預言
はア
シヤスタ
王の七年
即ち王が
彼の命を
下し又エ
ズラに書
を興へし
年よりの
ものなら

キリストの来る時
杖エメを離れず法を立る者
その足の間をはなること
なくしてシロの来る時にま
で及ばん(創四十九十)
汝の民と汝の聖邑のために
七十週を定めおかる而して
悪を抑へ罪を封じ愆を贖ひ
永遠の義を携へ入り異象と
豫言を封じ至聖者に膏を灌
かん汝曉り知べしエルサレ
ムを建なほせと云ふ命令の

ピラト彼等に曰けるは我な
んぢらの王を十字架に釘べ
けんや祭司の長等こたへけ
るはカイザルの他われらに
王なし(約十九十五)
*註を見るべし

ん今此年
より我等
の主の苦
迄は丁度
四百九十
年にして
七十週(ハ
年の)に
當る
以士喇書
七章十一
節を見よ

出るより「メツヤ」たる君の
起るまでに七週と六十二週
ありその街と石垣とは擾亂
の間に建なほされんその六
十二週の後「メツヤ」絶れ
ん但し是は自己のために非
るなり……彼一週の間衆多
の者と固く契約を結ばん而
して彼らの週の半に犠牲と
供物を廢せんまた残暴可惡
者羽翼の上立ん斯てつひ
にその定まれる災害残暴る

(四)

者の上に樹ぎくだらん(但九。二十四より二十七)

この殿の後の榮光は従前の榮光より大あらんと萬軍の

かれ聖靈に感じて神殿に入り兩親その子イエスを律法の例に循ひて行はんと携來りしにシメオン嬰兒を抱き神を讚め奉れり(路二。二十七

(基二。九)

及二十八)

馬拉基三章一節を讀むべし

イエス日々殿にて教ふ(路十九。四十七)

パフデズマのヨハ子の來る事

(五)

視よエホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤを汝らにつかわさんかれ父の心にその子女を慈わせ子女の心にその父をおもはしめん是は我が來りて祖をもて地を撃つことあからんためなり(馬四。五、六)

爾の妻エリサベツ男子を生ん其名をヨハ子と名くべし又イスラエルの民の多の人を主なる其神に歸す可れば也彼エリアの心と才能を以て主の先に行ん是父の心に子を慈はせ逆れる者を義人の智に歸せ主の爲に新なる民を備んとあり(路一。十三十六及び十七)

視よ我わが使者を遣さんか

夫あんにち先ちて道を備る

れ我面の前に道を備んまた
汝らか求むるところの主す
なはち汝らの悦樂ぶ契約の
使者忽然その殿に來らん視
よ彼來らんと萬軍のエホバ
云たまふ(馬三。一)

我が使者を我なんちの前に
遣さんと録されたるは即ち
是なり(太十一。十)

よばるゝもの、聲きこゆ云
くなんぢら野にてエホバの
途をそなへ沙漠にわれらの
神の大路をさほくせよと一
もろくの谷はたかくもろ

當時パナテマのヨハチ來
りてエダヤの野に宣傳へて
曰けるは天國は近けり悔改
めよ(太三。一より三)

くの山と岡とはひくゝせ
られ曲りたるはさほく崎嶇
はたひらかにせらるべし斯
てエホバの榮光あらはれ人
みな共にこれを見んこはエ
ホバの口より語りたまへる
なり(賽四十。三より五)

路加傳一章と三章を繙きてパ
ナテマのヨハチの誕生
の話及び説教の話を読め
ヨハチの傳と列王紀上十七章
十八章及び二十一章にあ
るエリヤの傳とを比較し見
よ其相類似するを見るあら
ん

キリストの誕生
ヤコブより一箇の星いでん
イスラエルヨリ一條の枝を
こらん(民二十四。十七)

夫イエスはヘロデ王の時ユ
ダヤのベツレヘムに生れ給
しが其とき博士たち東の方
よりエルサレムに來り曰け
るはコダヤ人の王とて生れ
給る者は何處に在す乎われ
ら東の方にて其星を見たれ
ば彼を拜せん爲に來れり(太
二。一と二)
かれら往り前に東の方にて
見たりし星かれらに先ちて

*此項書
ハ元ダビ
テニ用ヒ
ラレタリ
シカダビ
テハ即チ
キリスト
ノ模範ナ
レバキリ
ズトニ至
リテ成就
サレタル
モノト云
フベシ

ひとりをまなこの嬰兒をまなこわれらのため
に生れたり我儕はひとりの
子をあたへられたり(賽九。六)

嬰兒の居所にいたり其上に
止りぬ(太二。九と十)

今日ダビデの邑に於て爾曹
の爲に救主すくひぬしうまれ給へり是
主たるキリストあり(路二。十
一)

ベツレヘム、エフラタ汝はユ
ダの郡中にて小き者なり然
れどもイスラエルの君とあ
る者汝の中より我ために出

エスハユダヤのベツレヘム
に生れたり(太二。四と五又路
二。四より七)

べしうの出る事は古昔より
永遠の日よりなり(米五〇二)

シバのもろくの人コガチ
乳香をたづさへ来りてエホ
バの懇をのべつたへん(賽六
十。六)

タルシ、および島々の王た
ちは貢をよさめシバとセバ
の王たちは禮物をよげん

(詩七十二。十)

撒母耳前書十三章十四節及び十六章を編きてベツレヘ

既に(博士等)室に入りければ
嬰兒の其母マリヤと偕に居
を見ひれふして嬰兒を拜し
寶の盒を開て黄金乳香没薬
など、禮物を献たり(太二。十二)

ム人なるエサイの子ダビデの傳を讀め

キリスト、アブラハムより降る事

汝の子孫によりて天下の民
皆福祉を得べし(創二十二。十
八、同二十六。三より五、及ヒ同
二十八。十三、十四)汝の妻サラ
必ず子を生ん汝其名をイサ
クと名くべし我彼および其
後の子孫と契約を立て永久
の契約とあさん(創十七。十九)

アブラハムの裔なる——イ

エス、キリスト(太一。一)

キリストは我儕を律法の詛

より脱しめ玉へり……是ア

ブラハムに約束し給ひし恩

恵をイエス、キリストに因り

て異邦人にまで及ばしめん

が爲なり(加三。十三と十四)

それ約束はアブラハムと其

裔とに立給ひし者にして多

創世記十三章を開きて神の
アブラハムを召し給ひし事
を讀め

の人を指て裔と言ふに非ず
唯一人を指て爾の裔と言ふ
也これ即ちキリストあり(加
三。十六)

キリストのユダの族より出
タビデの家より來るべ
き事

またヨセフの幕屋をいさみ
「エフライム」の族をえらまず
我儕が主のユダより出し事
は明かなり(來七。十四)

ユダの族そのいつくしみた
まふシオンの山をえらびた

まへり(詩七十八。六十七、六十
八)

エツサイの株より一つの芽
いで、その根より一ツの枝は
エツサイの子ある——ダビ
デノ裔イエス、キリスト(太一。
一)

われわが撰みたるものと契
約をむすびわが僕ダビデに
むかひたりわれちんぢの裔
をどこしへに固ふしちんぢ
の座位をたて、代々におよ
ダビデは預言者にして神こ
れに誓を立て其血統の中よ
りキリストを擧て位に即し
めんと矢たまへるを知り(徒
二。三十)

ばしめん(詩八十九。三と四)

エホバいひたまひけるは視
よわがダビデに一の義き枝
を起す日來らん(耶二十三。五)

(主なるイスラエルの神は)我
侪の爲に極救の角を其僕
ダビデの家に挺たまへり(路一。
六十九)

エホバ眞實をもてダビデに
誓ひたまひたれば之にたが
ふことあらじ曰くわれなん
ぢの身よりいでし者をなん
ぢの座位にさせしめん(詩百

神は其約束に従ひて斯人の
裔より救主イエスをイスラ
エルに興し玉へり(徒十三。二
十三)

三十二。十一)

キリストノ處女より生るべき事
主みづから一の豫兆をかん
ぢらに賜ふべし視よおどめ
孕みて子をうまんその名を
イソマヌエルと稱ふべし(賽
七。十四)

六ヶ月に當ガリラヤのナザ
レと名たる邑のダビデの家
のヨセフと云る人の聘定せ
し所の處女に神よりガブリ
エルといふ天使を遣された
り其處女の名はマリヤト云
り天使いひけるはマリヤよ
懼るゝ勿れ爾は神より恵を
得たり爾孕て男子を生ん其
名をイエスと名べし(路一。二

路加傳一章二十六節より五十六節及同二章を讀む可し

十六、二十七及三十、三十一)

豫言者たる事
キリストの務

汝の神エホバ汝の中汝の兄
弟の中より我のどき一個
の預言者を汝のために興し
たまはん汝ら之に聽ことを
すべし(申十八。十五)

神はあらかじめ擬たまひし
イエス、キリストを遣れんモ
レ我儕の先祖たちに告て
曰けるは主なる爾曹の神は
爾曹の兄弟の中より我に似
たる一人の預言者を起さん
其爾曹に告る凡の言を聽く
べし(徒三。二十及二十二)

教師たる事

我言をその口に授けん我が
彼に命ずる言を彼ことく
く彼らに告べし(申十八。十八)

イエス言けるはわれ己より
言に非ず我を遣し、父わが
言べきこと我かたる可こと
を命じ給へる也(約十二、四十
九)

救主たる事

彼は正義して拯救を賜はり

キリスト、イエス罪人を救ん

(亞九。九)

神きたりてなんぢらを救ひ

ために臨れり(提前一。十五)

たまふべし(賽三十五。四)

牧者たる事

我かれらの上に一人の牧者
を立ん是わが僕ダビデなり
彼はかれらを牧ひ彼らの牧
者とあるべし(結三十四。二十
三)

祭司の長たる事

エホバ誓を立て、聖意をか
えさせたまふことあし汝は
メルキセデクの状にひとし
くどこしへに祭司たり(詩百
十。四)

王たる事又審判主たる事

我は善牧者にて己の羊を識
また己の羊に識る—われ羊
の爲に命を捐ん—遂に一の
群一の牧者となるべし(約十。
十四より十六)

彼はメルキセデクの班の如
き祭司の長なりと神に稱ら
れき(來五。十)

彼王となりて世を治め榮え
公道と公義を世に行ふべし
其日ユダは救を悉イスラエ
ルは安に居らん其名はエホ
バ我済の義と稱らるべし(耶
二十三。五六)

その日その時にいたらばわ
れダビデの爲に一の義き枝
を生せしめん彼は公道と公
義を地に行ふべし(耶三十三。
十五)

シオンの女よ大に喜こべエ

かれ諸の敵を其足の下に置
どきまでは王たらざるを得
ざれば也(哥前十五。二十五)
ピラト、イエスに問て曰ける
は爾はユダヤ人の王なるか
答けるは爾が言る如し(路二
十三。三)

ナタナエル答て曰けるは「ラ
ビ」爾は神の子なり爾はイス
ラエルの王なり(約一。四十九)

ルサレムの女よ呼ばれ視よ
汝の王汝に来る(亞九。九)

キリスト聖靈を授らるべき事	預言者イザヤの書を予しに	イエス其書を展て斯録れた	る所を見出せり主の靈われ	に在す故に貧者に福音を宣	傳ん事を我に膏を沃て任じ	心の傷る者を醫し又囚人に	釋さん事と替者に見させん	事を示し又壓制らるゝ者を
主エホバの靈われに臨めり	こはエホバわれに膏をそ	ぎて貧きものに福音をのべ	傳ふることをゆだね我をつ	かはして心の傷める者をい	やし俘囚にゆるしをつげ縛	められたるものに解放をつ	げエホバのめぐみの年を告	

しむ(賽六十一。一と二)

縦ち主の禧年を宣播んが爲
に我を遣せりイエス書を捲
その役者に與へて坐しけれ
ば會堂に在者みあ目を注て
視なせりイエス彼等に言け
るは此録れたる事は今日な
んぢらの前に應り(路四。十七
より二十一)

其子や、生長して精神強健
に智恵みち神の思寵その上
に臨り(路二。四十)

神の遣しゝ者は神の言を語

その上にエホバの靈といま
らん(賽十一。二)

る蓋神これに靈を賜ひて限
量なければ也(約三。三十四)
天忽ち之が爲にひらけ神の
靈の鴿の如く降て其上に來
るを見る(太三。十六)

我わが靈をかれにあたへた
り(賽四十二。一)

此ナザレより出たるイエス
は神より聖靈と才能を以て
膏を沃がれ(徒十。三十八)

わが義しき僕(賽五十三。十一)
道徳上キリストの圓満ある事
義なるイエス、キリスト(約壹

エホバ我儕の義(耶二十三。六)
正義はその腰の帯となり忠
信はその身のおびとあらん
(賽十一。五)

イエスは爾曹の義となりた
まへり(哥前一。三十)
之に乗るもの忠信また誠實
と稱らる(黙十九。十一)

なんぢの聖者(詩十六。十)
至聖者(但九。二十四)

聖者義者(徒三。十四)
神の聖なる者(路四。三十四)

彼は正義して(亞九。九)
彼は暴をふこなはず(賽五十
三。九)

聖潔して不善ことあく織垢
なし(來七。二十六)

その上にエホバの靈どいま
らんこれ智慧聰明の靈(賽十
一。二)

イエス智慧彌増り(路二。五十
二)
智慧満ち(路二。四十)
聞者みな其智慧を奇とせり
(路二。四十七)

その口には虚偽なかりき(賽
五十三。九)

その口に詭譎なかりき(彼前
二。二十二)

毛をきる者のまへにもだす
羊の如くしてその口をひら

かれ訴れて訴れず(彼前二。二
十三)

かざりき(賽五十三。九)

(彼は)柔和にして(亞九。九)

我は心柔和にして謙遜者な
り(太十一。二十九)

かれは叫ぶこと多く聲をあ
ぐること多くその聲を街頭
にきこえしめず(賽四十二。二)

我を人に顯すこと勿れと戒
たり(太十二。十六)

また傷める蘆をあることな
くほのくらき燈火をけすこ
どなく(賽四十二。三)

イエス出て多の人を見て之
を憫み其病る者を醫せり(太
十四。十四)

馬太傳五章より七章に至る「山の上のいのり」を讀め

財産の少なかりし事

かれは侮れて人にすてられ
悲哀の人に於て病患をしれ
りまた面をおほひて避るこ
とをせらるゝ者のごとく侮
られたりわれらも彼をたふ
とまざりき(賽五十三。三)

冢子を生それ市に裏て槽
に臥せたり此は客舎に彼等
の居處あかりしが故なり(路

二。七)

狐は穴あり天空の鳥は巢あ
り然ど人の子は枕する所な

し(太八。二十)

その故土にいたり會堂にて
教しに人々奇み日けるは此

不思議をなせし事

そのとき瞽者の目はひらけ
聾者の耳はあくことを得べ

人の智慧と異なる能は何處
より來るやこれ木匠の子に
あらずや其母はマリヤその
兄弟はヤコブ、ヨセ、シモン、ユ
ダに非ずやその姉等はみな
我儕と偕に在に非ずや然る
に此人の凡て此等の事は何
處より來しや遂に厭て之を
棄(太十三。五四より五七)

諸ヨハ子獄にてキリストの
行し業を聞その弟子二人を

しそのとき、破者は鹿のごとくにとびはしり、啞者の舌はうたうたはん(賽三十五、五、六)

彼に遣して曰せけるは来るべき者は爾なるか又われら他に待べき乎イエス彼等に答て曰けるは爾曹が聞ところ見どころの事をヨハ子に往て告よ替者はみ破者はわゆみ癩病人は潔まり聾者はきし死たる者は復活され貧者は福音を聞せらる凡そ我ために躓ざる者は福なり(太

十一。二より六)

約翰傳九章替愈せる話馬可傳七章三十一節より終に至

る聾啞を愈せる話及び同福音九章十四節より二十九節に至る悪鬼を逐出せるの話を読むべし

反對を受けたる事

故なくしてわれをにくむ者わがしらの髪よりもおほく(詩六十九。四) 彼等我と我父を己に見かつ之を惡めり(約十五。二十四)

何かればもろくの國人はさわざた諸民はむなしきことを謀るや地のもろくの王はたちかまへ群伯はとも議りエホバとその受膏

ピラトとヘロデ先には仇たりしが當日たがひに親を爲り(路二十三。十二) それ誠にヘロデとポンテ、ピラト異邦人をよびイスラ

者どにさからひていふわれ
らその械をこぼちその繩を
すてんど(詩二。一より三)

エル民相共に此城に集り
爾が膏を沃たる聖僕イエス
に逆へり(徒四。二十七)

此とき祭司の長および民の
長老等カヤバと云る祭司の
長の邸の庭に集り詭計を以
てイエスを執へ殺さんと共
々に謀(太二十六。三と四)

路加傳二十三章一節より二十
七節迄を讀むべし
エルサレムに入る事

シオンの女よ大に喜こべ
ルサレムの女よ呼はれ視よ

爾曹むかふの村に住やがて
繋たる驢馬の其子と借にあ

汝の王汝に来る彼は正義し
て極救を賜はり柔和にして
驢馬に乗る即ち牝驢馬の子
ある駒に乗るなり(亞九。九)

るに遇ん夫を解て我に牽き
たれ(太二十一。二)

エホバよねがはくはわれら
を今すくひたまへ(ホザナ)
エホバの名によりて来るも
のは福ひたり(詩百十八。二十
五と二十六)

かつ前にゆき後に従ふ人々
呼びひけるはダビデの裔ホ
ザナよ主の名に託て来る者
は福なり至上處にホザナよ
(太二十一。九)

かんぢは嬰兒ちのみどの口

祭司の長と學者たち其行た

により力の基をまきて(詩八。二)

路加傳十九章二十八節より終に至る迄を讀め

我かれらに向ひて汝等もし 遂に銀三十にて約したり(太

まへる奇事を見また兒童輩の殿にて呼はりマビテの裔ホザナよと云を聞て怒を合イエスに曰けるは我等が言ことを聞やイエス答て曰けるは然り嬰兒乳哺者の口に讚美を備たりと録されしを未だ讀まざる乎(大二十一。十五と十六)

善も視さば我價を我に授けよ若しからずば止めよと言

二十六。十五)

ければ彼等すなはち銀三十を權りて我價とせりエホバ

二十七。五)

我に言たまひけるは彼等に我が估價せられしその善價

けるは此は血の價あれば賽銭の箱に入るべからずとて

を陶人に投あたへよと我す

共に謀この銀をもて旅客を葬る爲に陶工の田を買ひ故

なはち銀三十を取りてエホ

に其田は今に至るまで血田

バの室に投いれて陶人に歸せしむ(亞十一。十二と十三)

と稱らる(太二十七。六より八)

その日はずくなく(詩百九。八)

其處を去ゆきて自ら縊たり

(太二十七。五)
詩の篇に録して彼の家は墟
くあれ其中に人を住居する
勿れ彼の職は他人に得させ
よと云り(徒一。二十)

その職はほかの人にえられ
(詩百九。八)

斯て闇を取しにマツテアに
當ければ彼十一人の使徒等
と共に列れり(徒一。二十六)

棄てられたる事

わが神わが神なんぞ我をす
てたもふや(詩二十二。一)

三時ころイエス大聲に「エリ、
エリ、ラマサバクタン」と呼り

ぬ(太二十七。四十六)

牧者を撃て然らばその羊散
らん(亞十三。七)

遂に弟子等みちイエスを離
れて逃去ぬ(太二十六。五十六)

馬太傳二十章を讀め

苦の事并に死の事
まことに彼はわれらの病患
をおひ我儕のかなしみを擔
へり(賽五十三。四)

我心いたく憂て死るばかり
也(太二十六。三十八)

彼はわれらの愆のため傷
られわれらの不義のため

かれ木の上に懸て我儕の罪
を自ら己が身に任給へり是

碎かれみづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふそのうたれし痕によりてわれらは癒されたり(賽五十三。五)

我儕をして罪に死て義に生しめんが爲なり彼の鞭扑れしに因て爾曹醫されたり(彼前二。二十四)

エホバはわれら凡てのものゝ不義をかれのうへに置たまへり(賽五十三。六)

キリストの愛われらを勉せり我儕思に一人衆の人に代て死たれば衆の人すてに死たる也(哥後五。十四)

彼はくるしめらるれどもみづから謙りて口をひらかず

祭司の長々老たち彼を訟ふれども何の答もせず(太二十

屠場にひかるゝ羊羔の如く

七。十二)

毛をきるものゝまへにもだす羊の如くしてその口をひらかさりき(賽五十三。七)

かれは虐待と審判によりて取去れたりその代の人のうち誰かかれが活るものゝ地より絶れしことを思ひたりしや彼はわが民のどがの爲にうたれしあり(賽五十三。八)

兵卒等これを公廳に携ゆき全營を召集め嘲弄し畢て十字架に釘んとて曳往しが(可十五。十六と二十)

斯てかれの靈魂とかの献物を
をなすに至らば彼その手を
みるを得その日は永からん
かつエホバの悦びたまふと
とはかれの手によりて榮ゆ
べしかれは己かたましひの
煩勞をみて心たらはん(賽五
十三。十と十一)

斯て(罪人の一人)イエスに曰
けるは爾その國に來ん時我
を憶たまへイエス答けるは
試に我なんぢに告ん今日亦
んちは我と偕に樂園に在べ
し(路二十三。四十二と四十三)

彼はをいくの人の罪ををひ

(賽五十三。十二)

如此キリストも多の人の罪
を負んが爲に一たび犠牲と
せらる(來九。二十八)

すべてわれを見るものはわ
れをあさみわらひ口唇をそ
らし首をふりていふかれは
エホバによりたのめりエホ
バ助くべしエホバかれを悦
びたまふが故にたすくべし
と(詩二十二。七と八)

往來の者イエスを晉り首を
揺祭司の長學者長老等も
亦をあじく嘲弄して曰ける
は彼は神に依頼めり神もし
彼を愛しまば今救ふべし(太
二十七。三十九、四十一、及び四
十三)

(かれ犬)わが手をよびわが足
をさしつらぬけりわが骨は
盡く盡ふるばかりになりぬ
(詩二十二。十六と十七)

我手わが足を見て我なるを
知れ(路二十四。三十九)

かれらたがひにわが衣をわ
かち我がしたぎを闇にす(詩
二十二。十八)

兵卒ども……その上衣をと
り四に分て各その一を取ま
た裏衣を取り此裏衣は縫な
く上より渾く縫るものあり
ければ互に曰けるは之を裂
ずして誰の屬にならんか闇
にすべし(約十九。二十三と二
十四)

匪類あつまりきたりて我を
せめ(詩三十五。十五)

同じ十字架に釘られたる盜
賊も同じイエスを冒れり(太
二十七。四十四)

わが友わが親るものはわが
痕をみて遙にたちわが隣も
また。遠かりてたてり(詩三十
八。十一)

イエスの相議の人々および
ガリラヤより随ひし婦ども
遠く立て此等の事を見たり
(路二十三。四十九)

こゝろあしき證人あこりて
わが知ざること詰りどふ

多の人々イエスに妄の證を
言出せども其證あはず(可十

(詩三十五。十一)

四。五十六)

以賽亞書五十三章詩篇二十二篇
を繙きてキリストの死状を讀め
われを縫つものにわが背を
まかせわが鬚をぬくものに

以賽亞書五十三章詩篇二十二篇を讀み又約翰傳十九章
を繙きてキリストの死状を讀め
是に於て彼等その面に唾し
且拳にて撃りまた或人かれ

わが頬をまかせ恥と唾とを
さくるために面をむくると
どをせざりき(賽五十。六)

を批(たり)(太廿六。六十七)

われらは苦草をわがくひも
のにあたへわが濁けるとき
に醋をのませたり(詩六十九。
二十一)

醋に膽を和せてイエスに飲
せんと爲たり(太二十七。卅四)

エホバはかれがすべての骨
をまもりたまふその一つだ
に折るゝことなし(詩卅四。廿)

後に(兵卒)イエスに來しに己
に死たるを見て其脛を折ざ
りき(約十九。三十三)

この事成り録して其骨の一
をも摧ざるべしと有に應せ
ん爲なり(約十九。三十六)

「メッシヤ」絶れん但し是は自
己の爲めに非るあり(但九。二
十六)

此の如く人の子の來るも人
を役ふ爲には非ず反て人に
役はれ又おほくの人に代て
生命を予その贖とあらん爲
あり(太二十。二十八)

彼等はその刺たりし我を仰
ぎ觀(亞十二。十)

一人の兵卒戈にて其脅を刺
ければ直に血と水と流出た

埋葬の事

その墓はあしき者どもに
設けられたれど死るときは
富るものどもになれりか
れは暴をよこなはずその口
には虚偽なかりき(賽五十三
九)

り(約十九。三十四)

其とき二人の盜賊イエスと
偕に一人は其右一人は其左
に十字架に釘らる(太二十七
三十八)
曰くれてイエスの弟子ある
ヨセフと云るアリコマヤの
富人きたりてピラトに往い
エスの屍を請しかばピラト
その屍を付せと命すヨセフ
屍を取て潔き臬布に裹み之

復活の事

このゆえにわが心はたのし
みわが榮はよることぶわが身
もまた平安にあらんそは汝
わがたましひを陰府にすて
おきたまはずなんぢの聖者
を墓の中に朽しめたまはざ
る可ればあり(詩十六。九と十)

を磐に鑿たる己か新しき墓
におき大ある石を墓の門に
轉して去(太二十七。五十七よ
り六十に至る)

爾曹何ぞ死たる者の中に生
たる者を尋るや彼は此に在
り(路廿四。五と六)
神の甦らせ給し者は朽果ざ
りき(徒十三。三十七)
今キリスト死より甦りて寢
たる者の復生の首とあれり

昇天の事

(哥十五。二十)

なんぢ高處たかところにのぼり廟者やしろを
 どりこにしてひきひ禮物れいぶつを
 人のあかよりも叛逆者はんぎやくしやのな
 かよりも受たまへりヤハの
 神かみこゝに住たまはんが爲ためな
 り(詩六十八。十八)

斯かたて主しゆは彼等かれらに語かたしのち天てん
 に擧あはられ神かみの右みぎに座ましぬ(可
 十六。十九)

祝いわする時ときかれらを離はなれ天てんに
 擧あはられたり(路二十四。五十一)
 是こゝ故ゆゑに云いふことと有あり上うへに
 昇のぼしどき據とにする者ものを據とに
 し賜たまひを人に給たまへり(弗四。八)

路加傳二十三章五十節より同二十四章終迄を讀み又約翰傳二十章二十一章の二章をも讀む可し

聖靈の注ぎ

その後われ吾靈を一切の人
 に注がん汝らの男子女子の
 預言せん汝らの老たる人の
 夢を見汝らの少き人の異象
 を見んその日我またわが靈
 を僕婢しもべに注がん(耳二。二十八
 及二十九)

「ペンテコスタ」の日に至て弟
 子等みな心を合せて一處に
 在しに俄に天より迅風の如
 き響ありて彼等が坐する所
 の室に充り船の如きもの現
 れ岐れて彼等各人の上に止
 る是に於て彼等みな聖靈
 に満され其聖靈の言しむる
 に隨ひて異なる諸國の方言
 を言しめたり(徒二。一より四)

なんぢ禮物れいぶつを人のなかより
 受たまへり(詩六十八。十八)

遂にの靈うへより我儕にそ
いぎ(賽三十二。十五)

彼は今なんぢらが見どころ
聞どころの者を注り(徒二。三
十二)

使徒行傳第二章を盡く讀むべし

異邦人も亦キリストの救を受くるの榮を得る事
我また汝を立て異邦人の是故に爾曹ゆきて萬國の民
光となし我がすくひを地のに「パナマ」を施し之を父
へてにまで到らしむ(賽四十
九。六)

と子と聖靈の名に入て弟子
とし且わが凡て爾曹に命ぜ
し言を守れと彼れ等に教よ
夫われの世のすへまで常に
爾曹と偕に在なり「アーメン」

云くわれエホバ公義をもて
なんぢを召たりわれなんぢ
の手をとり汝をまもりなん

我目すでに萬民の前に設た
まひし救を見たりこれ異邦
人を照さん光なりまた爾の

偏く世界を廻て凡の人に福
音を宣傳へよ信じて「パナ
マ」を受ける者は救れ信ぜざ
る者は罪に定らるゝ也(可十
六。十五と十六)
我儕轉て異邦人に向ふべし
蓋主かく我儕に命じ給へり
(徒十三。四十六と四十七)

ぢを民の契約とし異邦人の
ひかりとなし(賽四十二。六)

民イスラエルの榮あり(路二。
三十より三十二)

ゼアルンの地ナフタリの地
海にそひたる地ヨルダンの
外ふの地こどくに人のガリ
ラヤに幽暗をあゆめる民は
大なる光をみ死蔭の地にす
める者のうへに光てらせり
(賽九。一と二)

イエスナザレを去ゼアルン
とナフタリの界なる海邊
のカペナウンに至て此に居
りこれ預言者イザヤの言に
ゼアルンの地ナフタリの地
海に沿たる地ヨルダンの外
の地異邦人のガリラヤ此等
の幽暗にをる民は大なる光
をみ死地と死蔭に坐する者

日の出る處より没る處まで
の列國の中に我名は大なら
ん(馬一。十一)

キリストの摸範
其犠牲

アブラハム乃燔祭の柴薪を
取て其子イサクに負せ手に

の上カミに光ヒカリいでたりと云いしに
應こたせん爲ななり(太四。十三より
十六に至る)

われ爾曹なんぢらに告つん多おほくの人々ひとら東ひがし
より西にしより來きたてアブラハム、
イサク、ヤコブと偕ともに天國てんこくに
座まし(太八。十一)

イエス十字架じゅうじかを負おつて罰ばつと
云いふ所ところへアブラハムの言ことにて曰いは

火と刀を取て二人どもに往り
 遂に神の彼に示したまへ
 る處ろに到れり是に於いて
 アブラハム彼處に壇を築き
 柴薪を臚列べ其子イサクを
 縛て之を壇の柴薪の上に置
 せたり斯してアブラハム手
 を舒べ刀を執りて其子を宰
 んどす(創二十二。六及ひ九。十)
 全章を讀む可し

ヨナ

ヨナは三日三夜魚の腹の中

ヨルゴタといふ所に往り(約
 十九。十七)
 彼等クラエオンと云る所に
 至りて此にイエスを十字架
 に釘ぬ(路二十三。三十三)
 己の子を惜ずして我儕衆の
 爲に之を付せる者(羅八。卅二)
 夫ヨナが三日三夜魚の腹の中

にありき(拿一。十七)
 此章を讀むべし

汝等イスラエルの全會衆に
 告て言べし此月の十日にれ
 のく羔羊を取べし汝らの
 羔羊は疵なかるべし而し
 て此月の十四日まで之を守
 りたきイスラエルの會衆み
 ち薄暮に之を屠りその血を
 とりて其之を食ふ家の門口

中に在し如く人の子も三日
 三夜地の中に在べし(太十二。
 四十)

イエスの行を見て神の恙を
 觀よと日(約一。三十五)
 爾曹は麩酵なきが如き者な
 れば舊き麩酵を除きて新し
 き團塊となるべし夫われら
 の逾越すなはちキリストは
 既に宰れ給ひり(哥前五。七)

の兩旁の椽と鴨居に塗べし

(出十二。三及五より七)

此全章を讀むべし

營の外に携へ出されたる

凡てその牡犢はこれを營の

是故に

イエスも己の血を以

外に携へいだして灰を棄る

て民を潔んが爲に門の外に

塲ある清淨處にいたり火を

苦を受しなり(來十三。十二)

もてこれを薪炭の上に焚べ

希伯來書九章十一節より

し(利四。十二)

十五節迄を見るべし

聖所にをいて贖祭をささん

ためにその血を携へ入たる

罪祭の牡牛と罪祭の山羊と

は之を營の外に携へいだし

(利十六。二十七)

負罪羊

然る時アロンその生る山羊

神罪を贖ざる者を我儕の代

の頭に兩手を按きイスラエ

に罪人となせり是我儕をし

ルの子孫の諸の悪事とその

て彼に在て神の義となる事

諸の悖反る罪をことごとく

を得しめん爲なり(哥後五。二

その上に承認はしてこれを

十一)

山羊の頭に戴せ選びをける

かれ木の上に懸て我儕の罪

人の手をもてこれを野に遺

を自ら己の身に任給へり(彼

るべし(利十六。二十一)

前二。二十四)

此章を讀むべし

銅の蛇
モーセすなはち銅をもて一條の蛇をつくり之を杆の上に乗をけり凡て蛇に咬れたる者その銅の蛇を仰ぎ觀ば生たり(民二十一。九)

民數紀略二十一章を繙き其四節より九節に至る蛇の苦難の條を讀むべし

モーセ野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし凡て之を信する者に亡るること無し永生を受しめんが爲なり(約三。十四及十五)

基督降世前年數	二 三 四 九	一 二 一	一 四 一	一 〇 四	五 一 五
開闢	洪水	アブラハムの應召	イスラエルの民埃及を去る	ソロモンの營殿	第二の營殿
事蹟					耶穌基督降誕

舊約聖書歴史年表

(但記載の事蹟は記憶に便せんが爲め大凡五百年宛隔たるものを掲ぐ)

(一六)

七二二	七二一	七二八	七三〇	七四二	七五〇	七五八	七五九	七六〇	七六一	七七二
		ヒゼキヤ	ホセア	アハズ		ヨラム				
囚虜						ベカ	ヘカヒヤ	メナヘム	シヤルム	
ナホム			ミカ			イザヤ				
			一六							
		二九	二八		二七					

(〇六)

七七三	七八五	七八七	八〇〇	八一〇	八二五	八三九	八四一	八五六	八二六	基督前
				ウシヤ	アザリア亦	ヤラバアム	アマシヤ			ユダ王
ザカリヤ							ヨアシ	ヨアハズ		イスラエル王
	ホゼア	アモス	ヨエル					ヨナ		預言者
					一五	一四		一三		引
					二六		二四	二二		照

五九八	囚虜 <small>とらひ</small>		二五	一
五九五		エゼキエル		
五八七		オバデア		
五三六	ゼルバベル <small>ゼルバベル</small> (總督 <small>さうとく</small>)			喇 二
五二〇		ハカイ		
		ザカリヤ		
五一五	第二 <small>だい</small> の殿成 <small>みや</small> る			尼 六
四五七	エズラエルサレム <small>エズラエル</small> に至 <small>いた</small> る			七
四四五	子 <small>こ</small> ハミア <small>ハミア</small> 至 <small>いた</small> るエルサレム			六
三九七		マラキ		二

六九八	マナセ		二二	三三
六四三	アモン			
六四二	ヨシア			三四
六三〇		ゼパニヤ		
六二九		エレミヤ		
六二六		ハバクク	二四	
六一〇	エホアハズ		二三	三六
	エリヤキム <small>エリヤキム</small> 又 <small>また</small> エホヤキム			
	エホヤキン			
六〇七		ダニエル		
五九九	ゼデキヤ			

基督前キリストぜん

ユダ王ユダおう

預言者よげんしや

引ひ

照しょう

終

明治二十三年五月十七日印刷
同年同月十九日發行

翻譯者

出版

發行者

田中萃一郎

東京市芝區三田二丁目
二番地

小柳津要人

東京市日本橋區通三丁目
十四番地

根岸高光

東京市牛込區市ヶ谷加
賀町一丁目廿三番地

丸善商社書店

東京市日本橋區通三丁目
十四番地

十字屋

東京市京橋區銀座三丁目



印刷者

發行所

同

定價十錢

ex 657

